（ R03 様式　4 ）

令和　4　年　2　月　25　日

教　育　長　様

代表者	校 園 名：	大阪市立墨江丘中学校
	校園長名：	林　憲治郎
	電　　話：	06－6674－3612
	事務職員名：	尾上　綾香
申請者	校 園 名：	大阪市立墨江丘中学校
	職名・名前：	首席・橋口徳治
	電　　話：	06－6674－3612

研究コース	
グループ研究Ａ	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
732665	
選定番号	152

令和３年度　「がんばる先生支援」研究支援　報告書

◇令和３年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究Ａ	研究年数	継続研究（２年目）
2	研究テーマ	体験型探求学習による教育の効果			
3	研究目的	・急速に進む高齢化社会、AI、テクノロジーの進化に対して「生きる力」の向上、新学習指導要領改訂に伴い、「主体的、対話的な深い学び」の育成のために、お互いの心と体の安全をを守るフルバリューコントラクトという考え方の育成を目指す。 ・「いのち」をテーマにした自分と他者を大切にする心の育成を体感を通じて育成する。 ・変化する教育に対して、自ら探求し変化し続ける教師の育成 ・学校教育、学校の教育活動を「変わらない為に変わり続ける教師の育成」 ・SDGｓ17項目に適した学校行事活動の意味づけと整理　SDGs委員会の設立取り組み ・体験型教育活動の中でPDCAサイクルとOODAループのサイクルの研究を行う。 ・不登校いじめ			
4	取り組んだ研究内容	いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSｺﾞｼｯｸ 9.5ﾎﾟｲﾝﾄ） 令和３年６月〇本校施設で冒険教育を土台としたローエレメント、ジャンボシーソで学級づくりチームビルディングを実施と教職員研修を行った。 令和３年１０月１５日・１８日 関西大学人間健康学部と墨江丘中学校と共同して、２日間、関西大学浅香山キャンパスのアドベンチャーエリアを使った2年生全員、校外学習を実施した。校外学習実施に向けて、不登校生徒、人間関係づくりが苦手な生徒への参加を促し、2年間不登校だった生徒が校外学習に参加し、その後、学校登校できるようになった。 令和３年１１月 〇関西大学人間健康学部　安田忠典先生から教職員オンライン講義を実施 〇株式会社マーベラスラボオンラインミーティング・企業が求める人材と体験型活動による効果と変化の報告会を開催した。 令和３年１２月・１月・２月 〇校内研修会、授業研修会を年間３回以上実施し教育手法の講習会を実施する。 オンラインの導入も含め、オンライン活用、オンラインでは補えない教育活動とを明確に分類する講習会の実施、または生活指導スキル研修会を実施 〇各学年アドベンチャープログラムを用いた総合学習を行い、協同的学習の学びの取り組みを行った。（なぎなた探求学習・オンライン探求授業・部活動地域貢献活動・SDGｓの取り組み） 令和４年1月 〇株式会社マーベラスラボ　人材育成研修会に参加 〇玉川大学ＴＡＰセンター　アドベンチャーリンクについての研修会に参加 令和４年2月〇アドベンチャープログラム、冒険教育または学校の教育目標である「いのち」についての講和、アンケートの実施・アドベンチャー教育についての授業 〇研究発表会と成果と課題についてのまとめ 〇今後の課題次年度の教育課題を明確化・今後の取り組みの提案ミーティングを実施			

5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。				
		日程	令和　4　年　2　月　18　日	参加者数	約　53　名	
		場所	大阪市立墨江丘中学校（多目的室）			
		備考	外部参加者は新型コロナウイルス感染症防止のためオンラインでの参加			

6	成果・課題	大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。
		【見込まれる成果１】 大阪市立墨江丘中学校教職員授業力向上を行う。 授業の在り方研究研修、伝達研修を行い生徒の感情にアプローチしたコーチング等を用いた授業展開の研究を行う。 《検証方法》 学校アンケートより、保護者・生徒アンケートの分かりやすい授業の評価ポイントを昨年度より（生徒アンケート）平均１ポイント以上向上する。（学校アンケート） 〔検証結果と考察〕 学校アンケートの結果から、昨年度判りやすい、授業の展開についての項目についての項目が生徒　82.5%（令和2年度）から86.8%とわかりやすいと思う満足度の項目が4.1ポイント向上する結果となった。生徒の実態把握、教師と生徒との人間関係づくりと、教員自らのコロナ禍の中での授業方法の工夫が今回の向上につながった。 　また新型コロナウイルスでの登校制限の中でも、各学年でチームとなり、通常であれば授業方法の連携も数少ない中、コロナ関係で連携する機会も増え、教員同士の授業連携、良いものを真似る横の連携ができたことが良かった。
		【見込まれる成果２】 問題解決能力、課題発見能力の向上 生徒の興味関心を高め、問題課題解決能力の向上を行う。 《検証方法》 学校アンケートより、子どもの学びに関する項目設定を行い、問題に対する取り組むことについて粘り強く取り組むことができたという肯定的回答を８５%以上肯定的回答を目指す。 〔検証結果と考察〕 学校アンケートの結果から「子どもの学びに関する項目」授業の判りやすさ、質問のしやすさと信頼関係、補充学習についての項目について（生徒・保護者）肯定的回答平均値、令和２年度3項目の質問平均値60%に対して令和３年度67%に上昇し子どもの学びに対する肯定的意見が向上した。また、文化祭、学年を含めてSDGｓの学びに力入れた。17項目の学びと発表をセットに考え、発表の中でも動画編集なども生徒自らが行い、クオリティの高い発表会を実施することができた。
		【見込まれる成果３】 教師と保護者、生徒間の信頼関係ラポールをより深く、築くことができ学校運営、学校生徒指導などにつながる。 《検証方法》 学校質問紙による「先生に質問しやすいですか？」「先生のことを信頼していますか？」の項目を２０２０年度全体値より平均２ポイント以上上昇（生徒・保護者の平均値）を目指す。 〔検証結果と考察〕 学校アンケート内容の「先生に対して質問がしやすいと信頼関係」に関する項目で、令和元年度（63.9%）令和2年（66.7%）令和3年度（75.4%）【すべて生徒】と昨年度より大幅に8.7ポイント上昇した。教師と生徒との距離感に関する研究も大学の先生より講話があり、生徒と教師の関係性が良くなっている傾向である。学校の安心安全と生徒の不安解消にとって教師との距離感を本研究で考えることができたことが大きな成果となっていると考える。さらに、関係性の向上から学力、興味関心へと発展し、自らの好き得意に気付ける探求学習の教材開発に結びつけていきたくことが必要である。

6	成果・課題	【見込まれる成果４】 大阪市教職員アンケートのまなびかｔ、学ぶ方法を構築することができる。 普段の授業の在り方を見直すきっかけとなり、授業力の向上につなげる。 《検証方法》 研究発表会において普段の授業の在り方を見直すきっかけとなったという質問紙アンケートにより、８０％以上の教職員について改善するきっかけとなったという肯定的回答を目指す。 〔検証結果と考察〕 本研究を通じて、意識的に授業の在り方や生徒同士の関係づくりについて考えるきっかけ（教職員アンケート91％きっかけとなったと回答）となり積極的に個人的に学習する教職員が増えた。ＧＩＧＡスクール構想、情報化の変化激しい時代にあり、数年前までの当たり前が当たり前で無くなった時代に、教員自らの探求が求められる。昭和、平成時代に支流であった黒板、板書、ノートなどの講義型学習から、自ら問題発見、問題開発能力の向上が求めれている今、教育方法の「不易」となる変えてはならない部分、「流行」の最先端の機器の活用などの選別が必要になってくると考えている。
		【見込まれる成果５】 不登校生徒約2、3年生22名のを学校行事、体験学習により仲間づくりを促し、改善できたという生徒を22名中５名以上改善することを目指す。 《検証方法》 不登校生徒30名以上の欠席生徒数　2，3年生22名の中で改善できた生徒を5名以上にする。 〔検証結果と考察〕 コロナウイルス感染症予防のためのオンライン授業での受講希望者や、コロナでの生活リズムの変化から全体の不登校生徒数が増加する結果となった。しかし、本研究の選定を受けて実施した冒険教育プラグラムの校外学習では、中学校に入学してから約2年間不登校であった生徒が、学年、担任の協力も得て参加することとなり、冒険教育を通じて学級の生徒と協力することを体感として感じ、翌日から登校するという成果があったことは次に向けての兆しとなった。しかし、不登校生の人数が、オンライン受講なども増えたことなどの環境の変化もあり、例年に比べて増加した。
		【研究全体を通した成果と課題】　具体的に記載してください。 人の記憶は、「感情が動いた時にしか長期記憶にならない」という研究論文があるように、人は勉強の解き方、方法を学んでも使用する頻度が少なければ時間とともに忘れる。今回、自分自身の体で感じる「体験」を通じて、人と人とのつながり、自分の感情の変化について探求した。挑戦するときにどのような感情になり、仲間との関わりを考える。今回、本校でも1年半以上不登校の生徒が、担任、学年の協力のもと体験学習に参加させられることができた。体験、ミッションの中で学級での仲間づくりがアクティビティを通じて自然に生まれ、その後継続して登校できる生徒が生まれた。コロナ禍の中にあり、分断が率いられる今だからこそ、生徒同士の人間関係の構築としては必要なプログラムである。探究学習とは、生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動であり、生徒の思考力や判断力、表現力の向上が求められる。コロナ禍の中にあり子どもたちの表現力が奪われつつある。今後、探求学習を体験を通じて学ぶことが自然と課題解決、人間関係能力の向上という教育課題に対応できるようになる。
		≪代表校園長の総評≫ 本研究の選定を受け生徒への教職員への接し方を考えるきっかけとなり、学校アンケートの質問項目の回答にもあるように授業改善が自然とできる仕組みができたことはとても有意義な研究であった。生徒指導の観点からでも不登校生徒への対応でも効果が出た。コロナ禍の中で各地方での学びの共同体を推進している学校訪問が実現できなかったことは残念であったが教職員の意識の変化は大きな成果となった。今後、探求学習の本来の対話、問題発見、問題解決能力を高めるための関わりの取り組みをさらに発展させて取り組む必要がある。今後、コロナ収束を見据えて本研究で得た経験を軸に本校が柱に添えている防災教育の観点からも教職員の意識の変化を期待したい。